

新帝国暦七五年の真実

ローエングラム王朝の勃興……と言つよりも、獅子帝ラインハルト・フォン・ローエングラムの登極に至る物語は一つの英雄伝説として、長く語り継がれることは間違いない。名もなき下級貴族から身を起こし、ローエングラム王朝初代皇帝の座に就いたのは、帝国軍幼年学校を卒業した彼が帝国軍少尉に任官してわずか八年後のことである。

頂点に達するまでのラインハルト・フォン・ローエングラムの足跡はまさに伝説という以外になく、少尉から帝国軍元帥までの一二の階級を一気呵成に駆け上がり、その間にゴルデンバウム王朝の中心となつた門閥貴族をリップシュタットの戦役で打倒。さらにフェザン自治領を併呑し、転じて、帝国との間に一五〇年の長きにわたって永久運動にも似た戦いを続けてきた自由惑星同盟領へ侵攻する。

自由惑星同盟を代表する用兵家であり、彼の終生の宿敵ともなつたヤン・ウエンリー提督は、数次にわたる戦いで幾度かの苦杯を帝国軍に仰がせたものの、自由惑星同盟そのものを救うには至らず、同盟は帝国軍の軍門に降ることとなり、ラインハルト・フォン・ローエングラムは遂に帝冠を戴くに至つたのである。その足跡の一步一步すべてが、きらびやかな輝きに織り上げられた英雄の叙事詩と言わざるを得ない。

この黄金獅子の叙事詩は、他の多くのサーガがそうであるように、面をも向けられぬほどの光彩に溢れた英雄詩と表裏一体のように、重く暗い闇を孕んだ悲劇の一面を併せ持っている。そして、ラインハルト・フォン・ローエングラムの物語において最大の悲劇というものがあつたとすれば、それはリップシュ

タット終結間際に起きた、いわゆる『ガイエスブルグの惨劇』以外にありえないだろう。この惨劇において、ラインハルトは、彼にとつての最大の理解者であり、協力者であり、そして友人であつた赤毛の若者を永久に喪つてゐる。

「ジークフリード・キルヒアイスが生きていたら……」

銀河を舞台とした一大叙事詩の時代を、その主人公と共に駆け抜けた多くの人々、特にラインハルトが即位後僅か二年余りで不帰の人となつてのち、ローエングラム王朝を支えた皇太后ヒルデガルト、帝国軍の総帥としてゐるいは帝国宰相として帝国に安定と繁栄をもたらしたミッターマイヤー元帥、および獅子の泉の七元帥たち。かれらのいずれもが口を揃え、覇業の半ばにして若くして逝つたジークフリード・キルヒアイスを惜しむ言葉を残しているのである。

「ジークフリード・キルヒアイスが生きていたら、帝国軍による自由惑星同盟への侵攻作戦（『ラグナロック』^{ラグナロック}神々の黄昏）作戦は無用のものであつたに違ひない。キルヒアイスが帝国と同盟との間の架け橋となり、両国は平和裏に共存するべき道を探り当てていたに違ひない」

「ジークフリード・キルヒアイスが生きていたら、ロイエンタールの叛乱もあり得なかつた。帝国による同盟の軍事征服そのものがなかつただろうし、たとえ帝国が同盟を軍事的に制圧したとしても、同盟の総督として派遣されていたのはキルヒアイスに違ひない。彼であれば、レンネンカンプのように敢えて地に乱を巻き起こすような不手際もしなかつただろうし、ロイエンタールのように自らの矜持を一切に優先させた挙げ句に皇帝に叛旗を翻すがごとき愚行もしなかつただろう」

「ジークフリード・キルヒアイスなら、皇帝ラインハルトに『回廊の戦い』を戦わせることもなかつただろうし、その結果として多くの帝国軍将帥を戦場に喪い、さらにはヤン・ウェンリーを暗殺者の凶刃に曝せしめるような状況を作り出すこともなかつたはずだ」

「キルヒアイスがいれば、彼の後見のもとで第二代皇帝アレクサンデル・ジークフリード帝の治世は遥かに早く収まり、新帝国の繁栄はいや増していたに違ひない」

「彼さえ生きていれば、ラインハルト帝もまたあのような病に斃れることもなかつたのではないか……」

一つ間違えば、ローエングラム王朝、あるいは始祖であるラインハルト帝に対する痛烈な批判にも転じかねない言葉は、しかし、多くは新帝国の柱石であり、あるいはその統治の頂きに立つ人々から漏らされていることは確かだつた。

この物語は、ジークフリード・キルヒアイスの、誰からも惜しまれた若すぎる死に関して、これまで誰にも知られることの亡かつた驚愕の事実を明らかにするものである。

キルヒアイスが遭難したのはガイエスブルグ要塞の大広間、リップシュタット戦役の勝利を祝い、ラインハルトが降将たちを引見した祝勝の席であつたことは広く知られている。

「ローエングラム侯、主君の讎^{かたき}を取らせていただく！」

主君ブラウンシュヴァイク公爵の屍体に隠したハンド・キャ

ノンの砲口を至近に突きつけられて硬直するラインハルトを初めとするローエングラム元帥府の将帥たちをよそに、一人暗殺者に躍りかかったのがキルヒアイスである。もし、アンスバッハがハンド・キャノン以外の武器を携えていなかったら、彼は無傷でこの大胆な暗殺者を取り押さえ得たに違いない。

史実は、アンスバッハが指輪に仕込んだレーザー・ガンによってキルヒアイスは致命傷を受け、『ラインハルトさま、宇宙を手にお入れ下さい』の言葉を遺してヴァルハラへ向かう門をくぐったことを告げている。

当時の軍医報告は告げている。

「キルヒアイス上級大將は至近距離からの胸部大動脈への貫通光条、および頸部動脈切断による大量失血による意識喪失状態となり、医務室に運び込まれた時にはすでに脳死状態となっていた。キルヒアイス上級大將が意識を取り戻すことは二度となかった」

ここまでは広く知られた事実である。

不思議なことに、この時の軍医の検死報告、および検死を行った軍医の報告書は非公開となっていて、これは意外に知られていない。

この事実を知るきっかけは些細なことである。ジークフリード・キルヒアイスの早すぎる死を惜しみ、彼が惨劇から生きながらえた世界を描くことに意欲を燃やす文章家は、プロとアマチュアを問わず星の数ほどにもいると言っただけ。このわたしもまた然り。キルヒアイスが生き延びた物語、あるいは史実通りに亡くなることになった小説や短文の中で、幾度となくガイ

エスブルグの惨劇のシーンを描いてきた。

そうこうする内に、いわゆる正史に記された内容だけでは満足できず、今少し詳しい情報を、つまりは暗殺現場での状況を知りたくなったのである。例えば、アンスバッハとローエングラム侯爵の距離であるとか、アンスバッハがハンド・キャノンを構えた時にキルヒアイス上級大將がどの位置にいたのか、さらには他の元帥府の将帥達が彼らからの程度まで離れていたのか、また負傷したキルヒアイス上級大將がどの程度の時間で医務室へ運ばれたのか、など他愛のない事実関係であるが、意外にも正史には詳しく載せられていないのである。

こうした情報は、周知のように帝立記録保存所に申請を出すことで容易に入手することができる。

提出した申請書进行处理した記録保存所の係官の応答は予想もしない内容だった。

「この情報はお出しできません」

係官自身にとっても意外に感じられたらしいことは、その表情が物語っていた。

当然のことだが、反問せざるを得なかった。

「なぜ……と言っただけ、どの情報が見たいのですか？」

「故キルヒアイス大公閣下の検死報告、および軍医のラインハルト陛下への報告書、それから暗殺現場の現場検証記録……いずれもが開示禁止の対象になっています」

「それはまた、なぜ？」

「さあ、私には何とも分かりかねます」

何ともおかしい。同じ暗殺事件だが、ヤン・ウェンリー同盟軍大將の暗殺事件では、ヤン大將に関する同様の報告書はすべ

て一般公開されている。また、柊館襲撃事件、ヴェルゼーデ仮皇宮襲撃事件なども、やや事件の性格は異なるとはいえ、取材目的が明確であれば、その全容に関する情報を得ることができるのだ。

旧王朝のゴールデンバウム王朝であれば、仮にも皇妃や、あまつさえ皇帝その人の御座所がテロリストに襲われるなどあつてはならぬことであり、こうした事件があつたことすら秘匿されても不思議ではない。しかし、ローエングラム王朝においては、そうした極端な秘密主義、あるいは権威主義は払拭されて久しい。まして、ラインハルト帝薨去以来、既に四半世紀近く。

今上アレクサンデル・ジークフリード帝の治世は極めて穏やかであり、ラインハルト帝が目指されていたという『自由帝政』が、その手によって実現されつつあるのではないかと評されるほどである。その治世下にあつて、なぜキルヒアイス上級大将の暗殺事件だけを機密のベールに覆う必要があるというのだろうか。

わたしは問うてみることにした。どの程度の機密レベルなのか、たとえば現在では非公開であつても、あと数年すれば公開されるというような機密指定ではないのか――と。

返ってきた回答はさらに意表を突くものだった。

「最高レベルの機密指定です。公開は……」

余程意外だったのか、係官の眉が大きく跳ね上がった。

「新帝国暦七五年となっています」

「新帝国暦七五年？」

今から、まだ半世紀以上も先ではないか。おそらくヒルデガルト皇太后は無論のこと、今上帝ですら、その頃にはヴァルハ

ラの住民となつていないに違いない、無論、わたし自身も、たとえ生命あつたとしてももはや何らかの著作を上梓しようなどと言う気力は持てなくなっているだろう。要するに、『ガイエスブルグの惨劇』に関して事実関係を知る関係者とその事実関係に興味を持つ者すべてがヴァルハラに旅立つまで、その詳細は公開しない。それが現帝国政府の意思と言ふことになる。

それにしても、なぜ……

「なお……」

係官の言葉がわたしを我に返らせたが、引き続いた言葉の内容は顔を引き攣らせるに十分だった。

「本件の開示を要求した人物については、事情聴取のために内国安全保障局よりの召喚が行われることになっています」

「内国安全保障局!？」

初代局長ハイドリッヒ・ラングは、『ローエングラム王朝最初の奸臣』として処刑され、内国安全保障局そのものの権限も大きく縮小されている。警察に毛が生えた程度とも言われるが、それでも召喚されて有り難い相手でないことは確かだ。

事実、内国安全保障局での事情聴取は多分に形式的なものであつても楽しいものではなかった。担当の調査官は特に犯罪者扱いをしたわけではなかった。『国家機密を漏洩させた過去の事例』について延々と話し続けただけで、何一つ具体的な事情を聴取しようとはしなかったのだ。

――いくら何でも、これは大げさすぎるし、おかしい。

無数の小説、映画からアニメーション、果ては舞台演劇にま